

「つ……………」

なんでこんなことになったんだ？

潤んだ視界がかすかに上下する。

下半身を圧迫する違和感は、剛直が体内を抉る異物感。容赦なく奥を埋めるかたまりのせいで息苦しい。

「あうっ、ぐ」

下手に動くと中が擦れ、鋭い性感が爆ぜる。歯を食い縛り、浅く腰を浮かす。

自重がめりこむと余計に辛くなると経験則でわかっているも、常に膝裏で力み続けられないといけないのは拷問だ。

手が使えない分バランスが取り辛く、重心を調整するのがむずかしい。

「兄貴のケツ、うまそうに頬張ってんじやん。もうパンパンだ」

引き締まった細腰にいやらしく手を這わせ、スワローがにんまり囁く。

「お互いの力才見ながらやれんだからもつと悦べよ」

「こんなの……喜べるかよ……」

鼻腔の奥が塩辛い。羞恥の限界で涙がでそう。手はシャツを擦った布で括られ、支えに縋ることもできない。

スワローの手が動き、ピジョンの腰から上へじらすように這いのぼっていく。

「自分のが見えて恥ずかしいの？ 耳まで真っ赤」

なんでこんなことになったんだ？ 答えは簡単、ピジョンがどうしようもない淫乱だからだ。

ピジョンは今、おいたをした「おしおき」を受けているのだ。

「……………スワロー、やめ……俺が悪かった、もう何度も謝つたらだから……」

「許してくれって？ 反省してねーな」

「してるよ、してるだろ！ これ以上なにをどうしたらいいんだ！」

叫ぶと衝撃が響く。ピンクゴルドの毛先に汗の玉が結び、点々と滴り落ちる。スワローは低く笑い、意地悪く腰を揺する。

「浮気したる？」

「あッ、待つ違」

「違わねー。証人もいるんだぜ」

とぼけるのは許さないと動きを荒っぽくすれば、途端にピジョンが甘ったるい声をあげだす。

淫売が。

スワローは舌打ちし、裸の胸にたれた鎖をぐつと引き寄せ

る。「ウあッが……」

がくんと前のめつたピジョンが首が締まる苦しさに呻き、弟の胸にもたれるも、構わずぎりぎり締め上げる。

「あのバー、劉に教えてもらつたの？ 飲み友達ができてよかつたな」

「ツぐ……劉は関係ない、俺から頼んだんだいいバー教えてくれつて……かまわないだろ別に、お前だつて毎晩遊び歩いてるじゃないか……男や女と手あたり構わず寝まくつて、どうかすると何日も連続で家空けて。せつかく何百マイルもこえて都会にきたんだ、俺だつてたまにはおいしい思いたいよ。劉はこつちに詳しいし、イケてる店教えてくれる」

「随分アイツのこと買つてんじゃん、ええ？」

「劉はいい奴だ……組んだことあるなら知つてんだろお前も」

「で？ 兄貴から誘つたの」

苦しい息の狭間から抗弁していたピジョンがふいに黙り込む。

露骨な態度の豹変に凶星のため息を一度、皮肉つぼく付け足す。

「……ラストイネイルを出すのは俺が二人目だとき。同郷の方かつて聞かれたよ、兄弟にや見えなかつたみてーだな」

数日前、スワローは例の店を訪れた。当然女連れだ。

不特定多数囲っているセフレの一人に連れていかれたのは、繁華街でも穴場として知られるバーで、客に供すイメーজカクテルが売りとのこと。

その言葉を真に受けて注文したら、ラストイネイルをさしだされた。赤茶に澄んだ美しいカクテル……お客様の瞳の色から連想したとマスターは言い、スワローは大いに気に入った。

グラスを一気に干したスワローとカウンター越しに対峙し、マスターがポーカーフェイスで付け足すまでは。

『こちらをお出しするのはお客様が二人目です』

すぐにぴんときた、一人目はピジョンだ。スワローの瞳の色は珍しい。瞳の色からカクテルを連想したというなら、最初の一人は兄に決まっている。ピジョンが一人でバーに来た、その事実にはちよつと驚いた。兄の酒癖の悪さを痛感しているスワローは、普段飲酒を固く禁じている。

アイツ、俺の言い付けを破つたのか。

『一人目の話聞かせてくれよ』

『一週間ほど前でしようか、常連さんに連れられてお越しになりました。お客様とおなじ、一瞥忘れがたい綺麗な瞳をしておりました』

『常連？』

『当店は鼻貞にしてください。東洋系のお客様です。プライベートにかかりますのでこれ以上はご容赦を』
 それで十分だ。スワローとビジョンに共通する東洋系の知り合いは一人しかいない、消去法による簡単な推理。
 援護射撃は思わぬ方向からやってきた。

『あくその人知ってるくお店の裏でヤツてたひとでしょ』
 スワローが同伴したウサギ耳の女が、ほろ酔い加減でカクテルを舐めながら衝動的な発言をかます。

『見たのかヤツてる現場』

『ちよつと離れたここにいたけどよく覚えてるよくこのへんじゃ見ないカオだし……4Pどーおつて声かけたんだけどフラれちやつた、残念。結構余裕なさそーだった、お酒入るとぐだぐだになるタイプだよアレ』
 ちよこんと摘まんださくらんぼをねぶりながら続ける。

『ちんたら指フェラしてたかと思つたらめちや気分出して股間揉ませてんの、ちよーウケる。そつからさきは見てないけど……金髪のおにーさん、ウリの経験あんのかも。もつともつとつてねだつて……すつこくやらしかつたもん。茶髪のおにーさんなんかたじたじ、ドーテーまるだしで面白かつた』

言いたい放題好き勝手にぶつちやけて、うまそうにさくらんぼをしゃぶる。

そして今、スワローはここにいる。

バーで聞し召してから適当なモーテルにしけこむ予定だったセフレをほったらかし、アパートに帰るなりビジョンを平手打ち、力づくで寝室に引きずりこんだ。

最初、ビジョンはなんで殴られたのかわからないといった顔をしていた。傑作だった。

その混乱が理解と絶望に取って代わるまで、スワローは今さつき見聞きしたことを懇切丁寧に語り聞かせてやった。

記憶がない、覚えてないの一点張りで逃げようとする兄を、実証を並べ立て徹底的に追い詰めた。

「本当に覚えてないんだ……あの夜は確かに劉と飲んでたけど酔い潰れて、気付いたら帰り道で……劉に肩借りて部屋まで送ってもらった」

「嘘吐け」

「本当だつてば信じるよ！ 初飲みで調子乗りすぎた、洒落たバーで浮かれてたんだ、ちよつとくらい羽目外したつていいだろ……ツ、でもお前が疑つてるようなことは誓つて、絶対ない……」

「だれに誓うんだよ。神様？」

「うあッあ！」

「先生？」

「ッあ、やめ、もつむりスアロ、ヤツウぐ！」

「それとも……母さん？ 言ってみろよピジョン、一体全体誰にないを誓うってんだエエ？」

「今、かあさんの名前だすな……先生つ、も」

ピジョンは意固地に首を振る。

下半身を貫かれた状態で、跨って犯されてる状況で。

もつとも聞きたくない人たちの名前を出されれば、もつとも思い出したくない人たちの顔が反射的に浮かんでしまい、喉を通る嗚咽が悲痛な喘ぎに変わる。

恥ずかしい、哀しい、悔しい。

「嘘じゃない、デタラメなもんか、本当に覚えてないんだから覚えてないっていうしかないだろ！ いくら気に入らなくたってそれがホントだ、キレイさっぱり忘れてるのにこれ以上どうしたらいいんだ！」

「劉となにもしてねーの？ ホントになんにも？」

「うっ……」

即座に否定すればよかった。

されど生来の素直さが、肯いに待ったをかける。スワローは兄の顔に一瞬だけ走った動揺を見逃さない。

「常連と一緒にだつたつてマスターは言った。俺の女もぼつちり見たつて証言してる。店の裏で……めちやくちや気分

出してたんだつて？ うまそうに指しやぶつて……ねつとり股ぐら揉ませて………ひとに見られながらやんの、楽しかった？ 視姦に疼くたちだもんな」

「誤解だ……」

「なあピジョン、ホントになんも覚えてねーの。フリじゃねえの」

「あああアッ!!」

スワローの手がおもむろに腰を掴んで引きずり下ろし、衝撃に喉が仰け反る。

否定したい。できればいい。でも……

羞恥に沸き返る脳内に疑念が渦巻く。

酔った勢いで？ それがい訳になるか？

ピジョン自身あの夜の言動の大部分を覚えてないのに、身の潔白を証明できるか？

覚えているのはとにかく気持ちよかったこと、身体が熱くてふわふわしてたこと……股間をまさぐる誰かの手の感触、下着を汚す湿りけ……

翌朝おそるそる検めたら、ボクサーパンツに吐精の染みがのこっていた。

そこで初めて、自分がしてしまったことに気付いた。犯してしまった過ちを突き付けられた。

忘れたかった。

なかつたことにしたかつた。

でも遅い、スワローにバレてしまった、劉を巻き込んでしまった、もう全部手遅れだ。

「いいトシこいて覚えてませんはねエよな、ホントはちゃんと覚えてんだろ、酔っ払ってナニしでかしたか……」

「俺っ、はっ、なにも」

「ガキの頃も一回あつたつけ。母さんの馴染みに唆されて、ウイスキーかつくらつて……」

「それ、は、関係ない」

「大ありだよ」

子供の頃の失敗を持ち出され反発がもたげるが、両手を縛られたビジョンにスワローの話を中断する術はない。

「あん時と同じだ。テメエから誘つたんだ」

「そんなことしてない、俺はそんなんじや……」

「そんな……何？」

「そんな……やらしいヤツじや……」

耳まで真っ赤に染めて弱々しく反駁すれば、スワローが最高のジョークを聞いたと高笑い。

「都合よく記憶喪失になつてるみてエだから思い出させてやつけど、兄貴はずつと前から、それこそ剥けてもねえガキの時分からそーゆーヤツさ」

「嘘だ……」

「酒が入るとことさら面倒くせエ、誰彼かまわず野郎に色目使いだす。顔色死んでる童貞だろうが飲んだくれた馴染みだろうが、テメエをよくしてくれんなら節操うつちやつてメス顔で媚売んのさ」

「ふざけるなよスワロー、俺はお前としか……」

「俺達の身体にや母さん譲りのとびきり濃くて淫蕩な血が流れてる」

「お前としかヤツてない……誓つて……」

「テメエひとりおキレイでいようつたつて問屋がおろさねえ、なあビジョンてめえは俺んことビツチだの尻軽だの言いたい放題ぬかすがお互い様だ、一皮剥きやあそつちこそ手遅れなビツチじゃねえか、覚えてねーとか言い張るぶん始末がわりい。実際テメエはとんでもねえ男好きだよ、好きでもねーヤツとただで寝れんだからな。あのヘタレ童貞の指ちゅばちゅばおしやぶりしてねだつたんだろ、シてくれて。母さんそっくり……インや、母さんのがきちんと金とるだけまだマシだ」

「許してくれスワロー、この通りだ……」

しつとり湿った毛先からぼたぼたと汗がたれ、涙と混ざって顔中濡らす。

下着に証拠が残っていた。

粘着く快樂の余韻が残っていた。

逃げ遅れた手を夢中で掴み、股間に導く残像の断片が、瞼の裏でチカチカ点滅する。

「最後までではしてない……劉は悪くない、全部俺が勝手に……手、手だけならギリギリセーフ……右手だけ……」

「オナニー手伝わせたの」
ピジョンが赤面する。

「……しようがないだろ、一人じゃ上手くできなくて……つい、イけなくて……お前が俺を、そうしたんじゃないか!!」
自分でやるより他人に任せただけのほうが気持ちいい、ピジョンをそう仕込んだのは他ならぬスワローだ。

だからこそピジョンは、あの時ドン引きされるのも覚悟の上で劉の手を借りた。続きをしてくれとせがんだのだ。

ピジョンのいい所は、他人の方が知り尽くしている。

「なのにお前がないから……代わりに……」

「ひつでえヤツだな、劉は穴埋めか。孔埋めてもらえなくて残念だったな」

「……ッ……」
「俺の身代わりにしたのか」

「……悪いことしたって思ってる……」

最後に見た劉の顔を思い出す。嫌悪と怒りに引き曇る表情……言葉よりなお雄弁な軽蔑の顔。

絶交されても文句は言えない自省の念に駆られるが、そうでもしなければ……

「劉の手を俺の手とすりかえたの」

「……」

「俺の手だつて思い込んでヤツたの」

「……」

無言で顔を背ける。スワローは軽く笑い、残忍そうに眸を細めて思いきり突き上げる。

「あッあああああッあッあああああああッあ!!」

「アイツも可哀想にな都合よく利用されて、親切心からバーに連れてってやったのに。それとも下心あったのか、本人に聞いてみねーとわかんねーな」

「劉は関係なッあうッああッあ、俺が全部ふあッあ俺が悪い、劉は引いた、いやがってたのにつんあッ無理矢理頼んで、逃げ道をなくしたんだ!! 俺ッ全部うあッ、気持ちよくなりたくて、カラダやばい、でも最後までヤツてな、ふあッやつあアあ、イッてない、酔ってて頭グチャグチャで、んあッアウあ、身体ドロドロでキツくって、ヤツてない、手、借りただけ!!」

スワローがガツガツと腰を打ち込む。

突き上げられて辛くて、奥にゴリゴリ当たって気持ちよくて、ピジョンは自分から腰を回す。

俺が悪い、全部俺が悪い、俺が淫乱だから悪い、俺のせいで皆に迷惑かかる……劉を利用した罪悪感、スワローを裏切った自責の念が膨れ上がるも、快感がそれを圧して膨張する。

「ハッ、ゴリゴリ削られて感じまくってんじやねーか！

見ろよピンピンに勃つてら、おしおきさんの好きなんだろう。劉にもその力を見せてやったのか、どろどろに溶けたはしたねー顔」

「見せつ、てな、頼むすわるー、もうやめイつく、イク」

「騎乗位は気に入ったかよ、たまにや見下ろすのもイイだろ。すっげー締まる……行き止まりガツガツ突かれて、前立腺もピンピンだな？ この体位案外好きなんじやねーの」

「おまえ、だつて、遊んでるじゃないか、ツア、浮気しまくってるの知ってるんだぞ……なんで俺だけ、ほどけよれ、手、キツいんだ頼む、落ちる！」

「嫉妬かよ嬉しいね」

全然本心じゃない口調で言つてのけ、ふと真顔になる。

「……俺の本気、ひとりで受け止められんの？」

スワローの浮気癖は病気だ。

「壊れちまうぜ」

「あつあつふあつあつああんあつあつあつあつ!？」

「腹から声出したほうが気持ちいいだろ、隣の部屋に筒抜けでめちやくちや興奮する……そのザマじゃシートも嘔めねえ」

視界が激しく上下動し汗が飛び散る、高圧電流のような快感にくりかえし貫かれ下肢がビクビクはねる。

「兄貴、感じすぎると手の甲嘔むだろ」

ピジョンが余裕のない喘ぎ声を張り上げる。

ただ喘ぐことしかできないから、よがり狂うことしか許されないから、仕方なく乱れまくる。

「はッ……はッ……」

赤く尖った先端と柔い会陰をびしよびしよに濡れそぼらせ、筋肉わななく内腿を先走りで滑らせた兄の痴態は、正直ひどくそそる。

「恥ずかしがつちやつてまあ……」

「ふウツぐ、ウウ、——う——う————ッ！」

縛られた手を口元へ持つていこうとしても、意地悪く揺すり立てられ突つ伏すくりかえし。

水音に合わせグチュグチュ捏ね回され、敏感すぎる会陰がしとどにぬかるみ、結合部から体内にかけ収縮。

がくんと膝がへたれてカリ太の亀頭がめりこみ、何もしな

くてもひとりでにずぶずぶ沈んでいく。

「すわろつ、ツくごめ、ふあつあ俺が悪、かった、あツうあツイふあつあ——ッ！」

前立腺を裏漉しする串刺しの衝撃に喘ぎ、途切れ途切れに続ける。

「お前がいるのに友達を……誘った……」

謝れ。

謝るんだ。

ちやんと謝れば許してもらえる。

「ごめんよ……」

お前が見てないところで、ひとりで勝手に気持ちよくなつて。

詫びながらも粘膜のうねりは止まず、搾り取るようにグラインドさせ、かと思えば大胆に抜き差しし、一気に腰を落としてスワロー自身を啜え込む。

「俺つこんなつ、ダメな兄さんで、イキすぎてごめん、あつああああつああ」
スワローが乳首を抓る。

「詫びる時くらい腰止めろよ淫乱、連続でイッてんじゃねーか」

弓なりに撓うからだ、大きく仰け反る喉、不規則に痙攣する体内。ヒク付く鬚がベニスをギュツと頬張り、射精へと

至らしめる。

「なんで謝んの？」

「浮気、した」

「なんで浮気したの」

「俺が……淫乱、だから……」

「なんで淫乱なの」

「……それは……」

「言えねえの」

「……酔つ払つて……魔がさした……うあつ!？」

「なんで淫乱なのちやんと言えよ」

「……お、れは……お前の兄さん、で……恥ずかしいことから、で……体じゅういじくりまわされて……気持ちいいの、止まなくなつて……弟にいじめられていやなのに……ひどくされると、前も奥もジュンとする……」

ピジョンの尻穴から白濁が染みだす。スワローが出した精液。

「兄貴はマゾなの」

「っ……」

「マゾなの」

「そう、だよ……悪いかよ」

お前が俺を、そうしたんじゃないか。
今この瞬間ピジョンはスワローを呪い、殺したいほど憎み、
スワローは兄の鎖に指を絡めて微笑む。

(以下続)

「よくできました」

「もういいだろ悪趣味なお遊びは……」

自ら囁く卑語に発情したか、ピジョンの前が再び勃ち上がり始めているのを見、あつさり鎖を手放したスワローが枕の下をまさぐりだす。

「へばんなよ。本番はこれからだ」

そして彼が取り出したのは、古風なボラロイドカメラ。

ピジョンが少年時代から愛用していた母の馴染みのおさがりで、最後の家族写真を撮った宝物。

その思い出深いカメラを今、スワローが胸の前に構えている。

「俺のカメラ……どうするんだ」

白い光が炸裂。

眩さにたまらず顔を背けたピジョンの扇情的なヌードと、腹にこびり付いた白い飛沫までもを、カメラから吐き出された写真はまざまざと暴き立てる。

「ポルノグラフィー撮らせてくれよ」